

因果のヒューム主義的分析の展望

山口尚

京都大学 人間・環境学研究科

因果とは何か。この問いは哲学者たちの関心を引いている。だがなぜ因果はこれほどまでに興味深いのか。その理由は複数ある。とりわけ重要なのは因果が「様相的な」あり方をしている点である。

「様相的な」あり方とは何か。日常的な例で説明しよう。私がマッチを擦る。そのマッチに火がつく。これは典型的な因果の事例である。他方で、ヤンキースが優勝した年にジョージ・W・ブッシュは大統領選で勝利した。ここには何の因果もない（ちなみに、米プロ野球と米大統領選の間には、アメリカンリーグのチームがワールドシリーズで優勝すれば共和党の候補が、ナショナルリーグのチームがワールドシリーズで優勝すれば民主党の候補が大統領選で勝利するというジンクスがある）。ヤンキースの優勝とブッシュの勝利の間に存する関係は「たまたま」である。しかしマッチを擦ることと点火することの間には何らかの必然的な連関が存在している。この必然的連関が因果の「様相的な」あり方である。

因果をめぐる哲学的問題の多くはこの「様相的」連関を問う。区別されたふたつの出来事が「必然的に」連関しているとはどういうことか。多くの哲学者がさまざまな仕方この問題に取り組んでいる。本発表はとくに「ヒューム主義 Humeanism」のアプローチを取りあげたい。

ヒューム主義とは、粗っぽく言えば、一切の様相を拒否する見解と特徴づけられる。なぜ様相を拒否するのか。その動機は複数あるが、最も根本的な動機は——こう言って良ければ——様相がミステリアスであるという点である。「…は必然的である」や「…は可能的である」などの言明には不明瞭さがつきまとう。それゆえ様相はより明快な枠組みによって説明される必要がある。

だがヒューム主義者も文字どおり様相を完全に拒否するわけではない。正確に言えば、ヒューム主義は還元可能でない様相を拒否する立場である。この意味でヒューム主義は、正確には、《様相的現象はすべて非様相的なものへ還元される》というテーゼによって特徴づけられる。したがってヒューム主義は、とくに因果の問題に関して、因果の必然的連関を還元的に説明することを目指す。

発表者はヒューム主義に共感している。とりわけデイヴィッド・ルイスのヒューム主義は有望であると思う。それゆえ本発表はルイスのアプローチを重点的に論じ、その可能性や利点を指摘する。ただし、幾人かの論者の指摘するとおり、ルイスの見解には「キズ」がある。そしてこの「キズ」は深い。ルイスのアプローチはそのままでは成功しない。だが発表者はこれを、ルイスの立場への決定的な反証と理解するのではなく、改善すべき課題と解釈したい。ヒューム主義——とりわけルイスのそれ——が

まだまだ追求する価値のある見解であることを説得できればと思う。

具体的には以下の問題が論じられる。

ヒューム主義はどのような仕方で様相的現象を還元するのか。——本発表はルイスの有名な「ヒュームのスーパーヴィーニエンス **Humean supervenience**」を紹介する。このアプローチは必然性や可能性、本質や偶有性、時制的性質などの様相的なものを巧妙に非様相的なものへ還元する。

ヒュームのスーパーヴィーニエンスは因果、傾向性、力を還元できるのか。——発表者は「できる」と答えたい。もちろんこれについては多くの意見がある。発表者は少なくともルイスの前提を受け入れるならば可能であることを論証する。とくに時空の四次元主義を採用することが因果や力を還元するのに十分であることを主張したい。

ヒュームのスーパーヴィーニエンスに欠点はないのか。——発表者は、正直に、「ある」と答える。しかもこれは因果や力を還元主義的に説明することに由来する。問題点はこのアプローチが性質とその因果的役割を切り離すことにある。この点は「如何主義 **quidditism**」の問題としてロバート・ブラックによって指摘されている。

この欠点を改善する余地はないのか。——発表者は「ある」と答えたい。ただし、私の思いつく限り、ルイスのアプローチはかなりの妥協を強いられる。改善された見解がヒューム主義的であるか否かは意見が分かれるかもしれない。

本発表は、結論として、よりよい改善法を探すのが今後のヒューム主義者の課題であることを主張する。